

## IV 研究の評価

### 1 研究の評価方法

研究は、子供の姿で評価していく必要がある。そこで、実際の子供の姿を、目指す子供の姿と照らし合わせ、子供たちの伸びや変容から明らかになった研究の成果と課題を、研究の評価とすることとした。目指す子供像については、次のとおりである。

◎進んで粘り強く学習に取り組む子供（学習意欲の高まり）

◎学習内容を確実に身に付ける子供（学習内容の定着）

◎自信をもって活動に取り組む子供（自己肯定感の高まり）

この3つの子供像にどれだけ迫ったか、次の調査の結果を基に検証した。

#### ■ 算数力テスト ～到達度の比較～

本校独自のテスト。年度はじめに実施し、「数と計算」領域に限定した内容である。

#### ■ CRT（算数） ～得点率の比較～

毎年、年度末に実施。過去3年間の平均得点率の全国比を比較する。

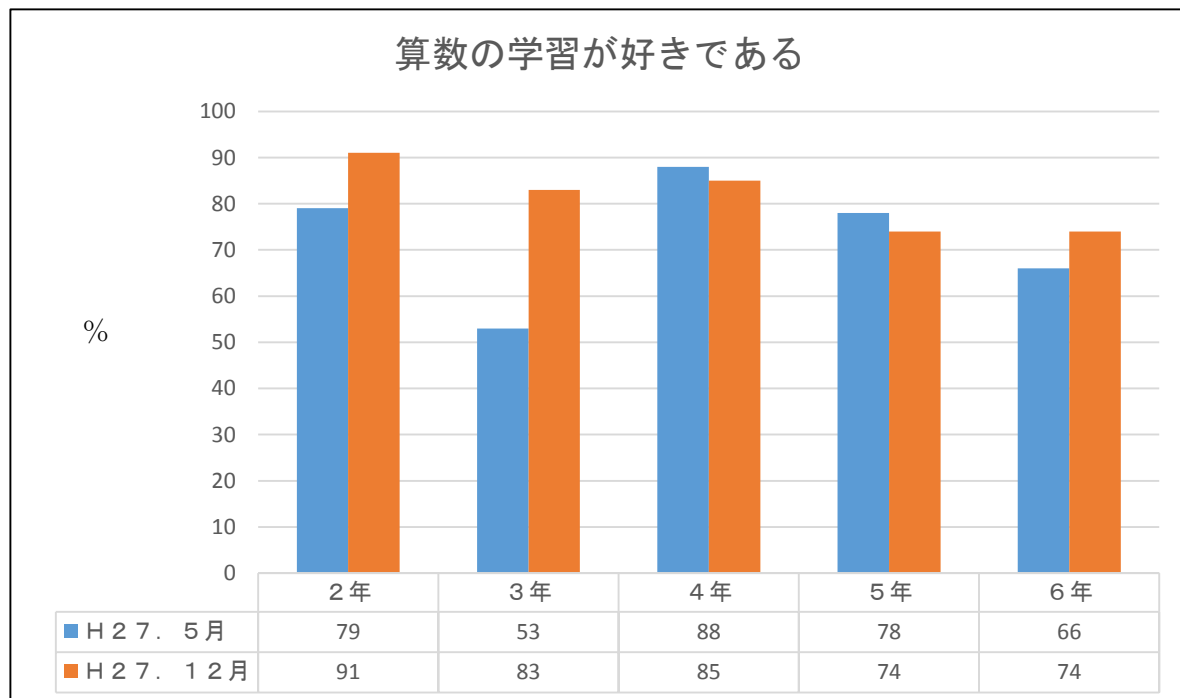
#### ■ 子供の意識調査 ～質問紙を使った調査結果の比較～

平成27年度の5月と12月に同じ質問紙による調査結果を比較する。

### 2 諸調査の結果及び考察

#### (1) 進んで粘り強く活動に取り組む子供（学習意欲の高まり）

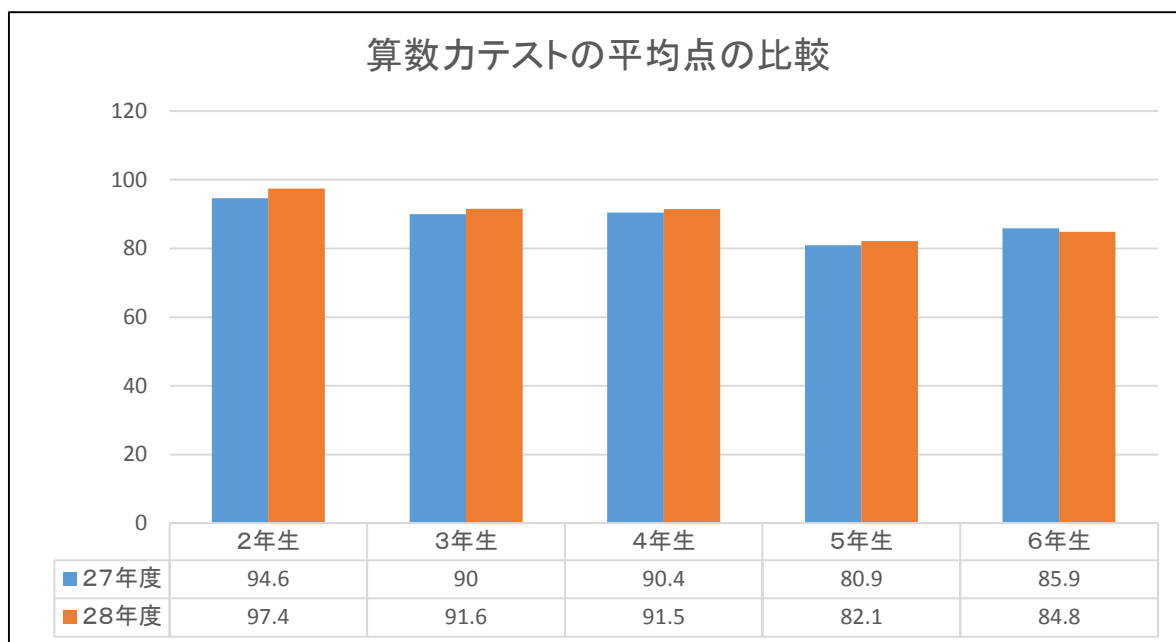
ここでは、子供の意識調査の結果をもとに、考察していくこととする。



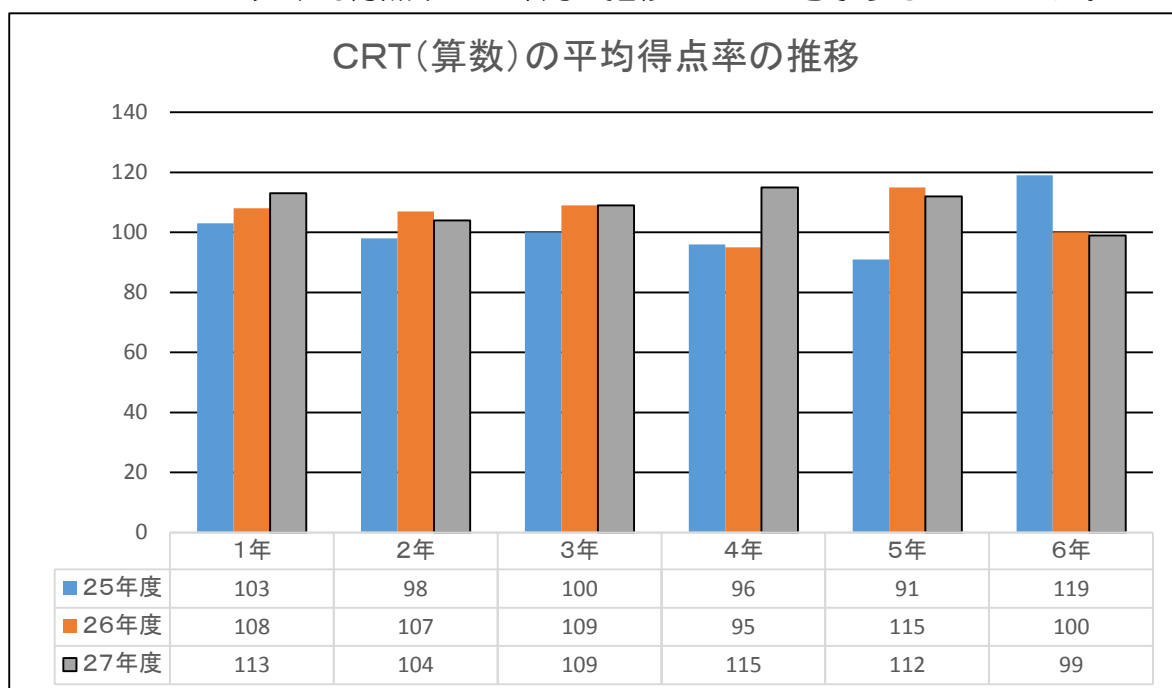
- 「算数の学習が好きである」と回答した子供の割合が大きく上がった学年が見られた。下がった学年もあるが、どの学年も70%以上の高さであり、安定している。
- 高学年になるほど、低くなる傾向にある。学習内容が難しくなっても、意欲的に取り組めるようにしていく必要がある。

## (2) 学習内容を確実に身に付ける子供（学習内容の定着）

ここでは、算数カテスト及びCRTの結果をもとに、考察していくこととする。  
算数カテストについては、平均点を比較した。



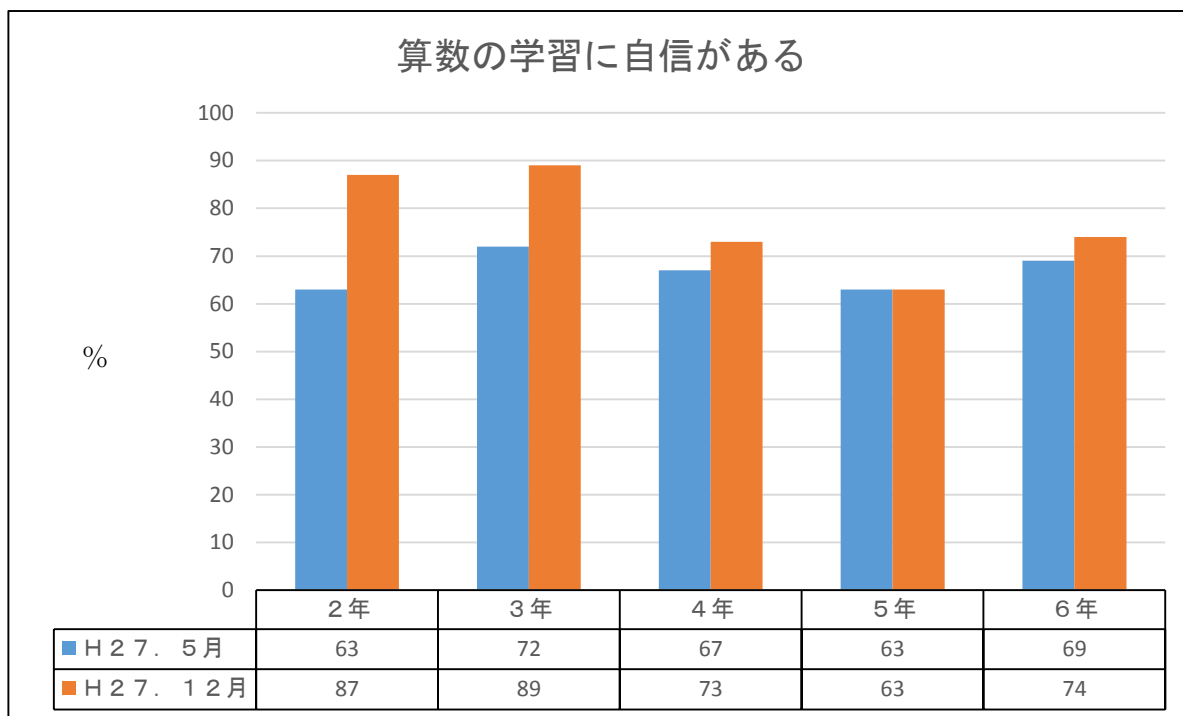
CRTについては、平均得点率の3年間の推移について考察することとした。



- 算数カテストについては、前年度の学年の子供たちより平均点が上がっている。また、昨年度より平均点が下がった学年も、前年度より、定着が図られていた。「数と計算」領域の実践の積重ねの成果と考える。
- CRTについては、平均得点率（全国比）が、過去3年間で全体的に上がってきている。平成27年度は、平均得点率（全国比）が、ほとんどの学年で100を超えた。「数と計算」だけでなく、他の領域において、向上してきている。
- 算数カテスト及びCRTの結果より、全体的に学習内容の定着が図られてきていると考える。

### (3) 自信をもって活動に取り組む子供（自己肯定感の高まり）

ここでは、子供の意識調査の結果をもとに、考察していくこととする。



- 「算数の学習が『できる』『分かる』自信があるか」という質問項目に対して、「自信がある」と回答した子供の割合が、下学年を中心に高まってきている。

## 3 成果と課題

研究の成果と課題は、次のとおりである。

### (1) 成果

- 下学年を中心に、学習意欲や自己肯定感が高まってきている。また、学習内容も全体的に少しずつ定着が図られてきている。その要因として、次ことが挙げられる。
  - ・ 「5つの場面」が設定された授業展開の中で、課題解決への見通しをもちながら、自分の力を発揮していく学びを繰り返し、子供たちが充実感や達成感を味わってきているから。
  - ・ 学習に集中できる環境の中で、困り感に寄り添うなど、できるだけ多くの子供のニーズに応える場面が増えたり、子供同士で学び合う雰囲気醸成されたりして、子供たちが安心感をもって活動に取り組んでいるから。
- 職員が「みんなでつくる」という共通認識のもと、全体研修や班活動において、主体性を発揮しながら、子供の側に立った授業を考えていくことを通して、一人一人の資質・能力を高めていくことができた。

### (2) 課題

- 授業のユニバーサルデザイン化を他教科等にも広げながら、日常的に取り組めるようにして、一人一人の子供を伸ばしていく必要がある。